
雪原の鮮血

遠藤 敬之

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

雪原の鮮血

【Nコード】

N2692A

【作者名】

遠藤 敬之

【あらすじ】

『魔獣』、人間が絶大な力を持つ害になる動物に付けた総称である。彼は斬る。それは、国や村を守るためでもなければ、自己の信念ゆえでもない。それはただ、たった一人の愛する者を守るため。

雪の上に滴る鮮血ほど、敵を導く道しるべに適しているものがあるのだろうか。

まだ二十に満たないだろうその少年は、左手で腹部を抑え、右手には鈍い光を放つ背丈ほどの銅剣を、引きずりながら携えていた。

真っ白な雪原とまるで正反対な赤い血は、彼の歩いて来た道を点々と示している。

その源泉となっっているのは、他でもない彼の体。そんな彼の体のあちこちには、鋭いもので抉られたような傷が重なり、乱雑に巻かれた白い包帯もまた、溢れる鮮血によりどす黒く染まっている。

(もっ……だめだ)

彼はそう呟くと、膝を折り曲げてその場に倒れ込んでしまった。そんな彼を思いやることはなく、流れる血は止まることを知らない。その場は、みるみるうちに血溜まりと化する。

頬を撫でる雪の感触を感じながら、彼はゆっくりと目を閉じた。かじかむ指は既に感覚がなく、冷たいはずの雪の絨毯も、彼には包み込むような暖かさを感じさせてくれた。

(無事、逃げてくれただろうか)

薄らぐ意識の中、彼は数時間前のことを思い出す。

彼の住んでいた村は一瞬で壊滅した。“トウルストウイ”と呼ばれる魔獣。外見は犬に酷似している。しかしそれを犬と間違える人間はいない。大きさが違うのだ。

その魔獣は、大型犬より遙か数倍の大きさで、長い体毛は寒冷地によく適している。眼光は紅に光っていて、口から飛び出た牙は何物でも噛み砕く。

魔獣とは、人間が、絶大な力を持つ人害になる動物に付けた総称である。それは太古より存在し、長年の歴史を見れば度々の衝突はあっても、概して平和に人間と共存してきた。

魔獣は山や森で、人は川や平野で。それぞれの領域を守り、他を犯すことはなかった。

彼らが人を襲うようになったのは、ほんの数百年前からである。

人口の増加で、食糧難や過密を打開するために人間は山林に侵出した。自分たちの利益のためだけに彼らの領域に侵入することは、彼らを怒らせるには十分すぎた。人は自分たちの力を過信し、彼らを力で制圧できると思っていた。

だがその力は想像以上で、逆に魔獣の反撃に遭い、各地で村々が滅ぼされていった。

一つ、また一つ。

彼らの怒りは収まることを知らず、遂には、本来の棲み処である山林から遠く離れたこの地にさえ、魔獣の手が伸びたのだった。

少年の身を置く村には、貧弱な装備の自警団が一つ。当然のごとく、圧倒的な数と、圧倒的な強さをもつトウルストウイ軍団に、一矢報いることなく全滅した。

村に怒涛のごとく侵入したトウルストウイは、何の抵抗もできず

逃げ惑う人々に容赦なく襲い掛かり、次々とその牙にかけていく。

彼は、恋人に先に逃げるように言った。自分がしんがりをつとめ、少しでも逃げる時間を稼ごうと。恋人は泣いて彼にすがった。しかし彼は、涙を堪えて繰り返し言った。頑なに彼の目を見た彼女は「きつと無事で戻って」と、溢れる涙を浮かべながら走り去った。

彼は斬った。

襲い狂う巨大な犬に真つ向から対峙し、敵の突進の勢いを利用して、横からなぎ払うように剣を滑らせる。

叫び声を上げることもできずにそれは倒れる。

今度は側面から一頭が襲い掛かる。

顔は正面を向けたまま、体をスツと後ろに引いて軸をずらし、敵の牙を避けてから鈍重な剣を振り下ろす。首が弾け飛んで、それはただの血肉の塊と化す。

どれくらい殺めたのだろうか。元はといえば人間が原因になったこの闘争。牙を剥く相手に容赦をかけるのはおかしなことだが、なんともしやれない思いが彼にはあった。自分は、この動物何十頭分の命の価値があるのだろうか？ これらを手にかけてまで自分は生きる意味があるのだろうか？

彼は、時おりそんな思いに駆られていた。小さな頃から魔獣と戦う術を教え込まれ、訓練に明け暮れた毎日。何故、そうまでして彼らと戦わなければならぬのだろうか？

彼はそう考えるたびに、心の底がきりきりと痛んだ。

だが、今日は違った。今の彼はそんなことはどうでもよかった。ただ、好きな人を守りたい。たったそれだけの、とてもちっぽけな理由。それで彼には十分だった。

彼はその時知った。自分は何もできないのだと。長く続くこの闘争を終わらせることも、このかわいそうな魔獣たちを助けることも、

生まれ住んだこの村を守ること。自分は何もできないのだと。

ただ、一つだけできること。

それは、心より愛した人を、たった一人だけ守るということだ。辛い毎日に一点の明かりを灯してくれた彼女。彼女のためなら、たくさんの魔獣を手にかけることも、自分の命すらも惜しくはなかった。

彼はその時、初めて自分の長年つちかった力を嬉しく思った。たった一人でも守ることができなのが、彼の短い人生のすべてを肯定してくれるのだから。

心地よい眠気のようなものがおそってきた。腹部の痛みも今や感じず、顔を横にすると、どこまでも続く白い雪原が広がっていた。太陽の光を反射して、それは金色に輝いているようだった。

(……ここは、天国か)

彼はそう考え、すぐにそれを嘲り笑った。

自分が天国にいけるはずがないではないか。自分の犯し続けた罪は大きい。それは自分でも自覚している。自覚していながら自分はそれを止めなかった。止められなかった。これで、地獄に堕ちるには十分だ、と。

ならばまだ自分は生きているのか。神はまだ自分を連れて行ってくれないのか。これが罰なのか。ならばこんな罰も悪くはない。白く光り輝く海原に、一人永遠に浮かび彷徨い続けるというのも、悪くはない。これが罰だというのなら、自分は甘んじて受けてやろう。

海……か。

彼の頭には恋人の姿が鮮明に浮かんだ。長い髪を振り乱して砂浜を駆ける彼女。楽しそうに笑う自分。真っ赤な夕日が海岸沿いを照らし、その赤いカーテンに包まれた二人は熱く愛撫し合う。

そしてそんな幻が消えていくと同時に、彼の命の灯火も、また消えようとしていた……。

刹那、暖かい液体が頬を伝った。
しかし、既に彼には、首を動かす力も残っていない、それは無常に
零れ落ちる。

しかしまた一滴。いくらでもいくらでも流れ落ちるその液体は、
彼の頬に一筋の川をつくった。
力を振り絞った彼は身体を仰向けに回転させ、空を見上げる。

泣いている。青い空が、透き通る、深い青空が、涙を流して
いる……？

「……どうして、戻ってきた？」

もう二度と開くことが無いと思われた彼の口から、言葉が搾り出
される。涙で目を真っ赤にはらした彼女は何も答えず、ただ、ただ、
涙を流し続ける。

「逃げると、言ったのに……」

虚空を仰いだ彼の瞳はゆっくりと彼女を捉え、しばし見つめ合っ
た二人は、すべてを理解した。

もはや、二人の間に言葉は要らない。涙の先に見える彼女の微笑
みは、あきらめに支配されていた彼の心を、勇気と希望の力で満た
していった。

そしてその揺れは、刻一刻と大きくなっていく。それはまるで、この星の鼓動のようでもあった。

彼女はおもむろに彼を抱き起こすと、自分の肩に彼の腕をまわした。彼女の白いコートにべっとり付着した血のりが、彼の怪我の酷さを物語っている。

そして、彼の頬にキスをした彼女は、ゆっくりと歩き始めた。

彼はもう何も言わなかった。ただ、そんな彼の目からも大粒の涙が零れ落ちた。

しかし、彼女はもう泣いていなかった。ざくざくと雪を掻き分けながら、しっかりとした足取りで歩き続ける。

彼も、痛みで意識が飛びそうになるのを堪え、今やほとんど力が入らない足で懸命に雪を踏みつける。少しでも彼女の負担を軽くしてやるために。

地の底から這って出でくような重低音が響く。奴らの雄叫びだ。

仲間を大勢殺めた人間を、彼らは許す気はないらしい。

「……ごめんな」

彼は天を仰ぎ見るように言った。

「ううん。私、今も怖いけど、あなたが『先に逃げる』って言ったときの方が、もっと怖かったから」

彼女は固い決意を示した凜とした目を残し、彼に微笑みかけた。

真っ直ぐと前だけを見据え、後ろは決して振り向かない。それは彼女の生き様そのものであり、彼が彼女に惹かれた一因でもあった。

「……………なあ」

「ん？」

「今度また、一緒に海を見に行こう。遠く、ずっと向こうの水平線に沈む夕日を……………見に行こう」

彼らの向かう先には沈みかけた太陽。

山際にまさに入り込もうとしている太陽と、周りに広がる一面の銀世界が、彼らの望む海の景色に似ていた。

後ろから覆い被さろうとする波に揉まれながらも彼らは進む。

安楽の地を求めながら、どこまでも、どこまでも歩き続けるのだ……………。

3 (後書き)

こんにちは。作者の遠藤です。

実は今回の作品『雪原の鮮血』は、去年の冬にふと「雪の上に滴る鮮血ほど、敵を導く道しるべに適しているものはあるだろうか」という一文が思い浮かび、小一時間で書き上げたものでした。それに多少の修正を加え、今回の投稿とさせて頂きましたが、いかがだったでしょうか？

短編ということで、世界観の説明や戦闘シーンなども一気に詰め込んでしまい、分かりづらかったところもあると思います。

ただ少しでも、読んでいただいた皆さんの心に残るものがあつたとしたら、この上なく幸せです。

宣伝になりますが、感想&批評を主な目的としたサイトを立ち上げましたので、よろしければお気軽に遊びにいらして下さい。

URL【<http://lombardia.gozaru.jp/index.html>】

それでは、次回作もよろしくお願ひします。最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました。

(^ ^)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2692a/>

雪原の鮮血

2008年11月7日07時28分発行